

岡本 進

(東京外国語大学大学院 susumu.okamoto415[at]gmail.com)

## 1. はじめに

本発表では、フィジー語における「教える」、「命じる」といった発言による伝達を表す動詞 (以下発言動詞とする) を複他動詞として分析する。そのうえで発言動詞に現れる節は副詞節ではなく、上位節の項として機能していると主張する。本発表の構成は以下の通り; 2 節で本発表の前提となる知識をまとめる。3 節では複他動詞として発言動詞を記述する。4 節では発言動詞に現れる節が補文節である統語的根拠を示す。5 節で全体のまとめを述べる。本発表中の例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り発表者によるものである。出典を明記していない例文については、すべてフィジー語母語話者である LG 氏 (1962 年生まれ、男性) に判断していただいた。

## 2. 背景知識

## 2.1. 類型論的概略

オーストロネシア語族、東マラヨ・ポリネシア語派、オセアニア諸語に属し、基本語順は VPA である。音素目録は以下の通り; /p, b [ᵐb], t, d [ᵐd], k, q [ᵐg], r, dr [ᵐr], v [β], f, c [ð], j [tʃ], z [ᵐdʒ], m, n, g [ŋ], l, w, y, a, e, i, o, u/。述部は複数の音韻語 (phonological word) から形成されうる。

P 項 (他動詞目的語) としての形態統語的振る舞いについて、普通名詞と固有名詞・代名詞の 2 つの名詞クラスが認められる。その相違は表 1 のように示される。

表 1: P 項として現れた際の普通名詞と固有名詞・代名詞の相違

	普通名詞 (1)a	固有名詞・代名詞 (1)b
冠詞	あり	なし
動詞の形態	語幹-他動詞接尾辞 <sup>1</sup> +3 人称目的語標示	語幹-他動詞接尾辞
出現位置	述部外	述部内

(1)a, b の P 項について、前者は冠詞と共起するが、後者はしない。動詞の形態もそれぞれ異なる。P 項の出現位置が異なり、(1)a の *vosa* 「話」はアスペクト標示 *tiko* の後に出現し、ある程度自由な語順が許される。一方、(1)b の *Samu* 「サム」は必ず動詞の直後に出現する。

(1) a. [ *eratou saa rogo-ca tiko* ]<sub>Predicate</sub> *na vosa*  
 3PA ASP hear-TR+3SG CNT ART speech 「彼らは話を聞いている」

b. [ *eratou saa rogo-ci Samu tiko* ]<sub>Predicate</sub>  
 3PA ASP hear-TR PN CNT 「彼らはサム (の話) を聞いている」

(Milner 1956: 54)

<sup>1</sup> 他動詞派生接尾辞は *-Ci, -Caki* と一般化される (*C* は語彙的に定められた子音を表す、Milner 1956: 27)。

## 2.2. 接頭辞 *VAKA-*

フィジー語の接頭辞 *VAKA-*<sup>2</sup> の機能は動詞化 (2)a、形容詞化 (2)b、副詞化 (2)c など多岐にわたる。本発表に関わるのは (2)a のような動詞化 (使役化) に関わる *VAKA-* である。

- (2) a. *vaka-mate-a*                      b. *na vosa vaka-Viti*                      c. *saa taba-ki vaka-vula*  
 CAUS-die-TR+3SG                      ART speech ADJVZ-Fiji                      ASP print-PASS ADVLZ-month  
 「殺す」                      「フィジー語」                      「月刊で発行される」 (Milner 1956: 66, 103)

## 3. 複他動詞としての発言動詞

複他動詞の類型論的研究である Malchukov et al. (2010: 55) は典型的な複他動詞を *give* とし、「教える」、「言う」に拡張しうることを示している。そこで本節では、複他動詞として発言動詞を分析する。

### 3.1. 複他動詞のアライメント

Malchukov et al. (2010) によれば、他動詞節の P 項と複他動詞節の R 項 (recipient)・T 項 (theme) について、類型論的に *indirective* 型と *secundative* 型の 2 つのアライメントが認められるという (図 1)。以下の例において、   <sub>R</sub> は R 項、   <sub>T</sub> は T 項であることを示す。

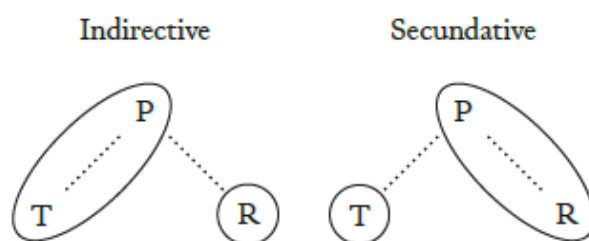


図 1: 複他動詞節のアライメント  
(Malchukov et al. (2010: 5))

### 3.2. 発言動詞のアライメント

フィジー語の典型的な複他動詞 *sol-i-a* 「与える」のアライメントは *indirective* 型である (3)。一方、接頭辞 *VAKA-* による派生動詞は *secundative* 型のアライメントとなる (4) (Dixon 1988: 50, Schütz 2014: 61)。

- (3) *au aa sol-i-a*                      *vua*<sub>R</sub>                      *na ivola*<sub>T</sub>                      <*indirective*>  
 1SG PST give-TR+3SG to+3SG                      ART book                      「私は彼に本をやった」

- (4) *e vaa-kani*                      *koya*<sub>R</sub>                      *e na dalo*<sub>T</sub>                      <*secundative*>  
 3SG CAUS-eat.TR                      3SG                      with ART taro  
 「彼女は彼にタロイモを食べさせた」 (Schütz 2014: 61)

しかし、発表者作成のフィジー語コーパス<sup>3</sup>で、*VAKA* 派生動詞である *vaka-vuli-ca* 「教える」(およびその変種である *vaka-vu-vuli-taka*, *vaka-taa-vuli-ca*, *vaka-taa-vu-vuli-taka*) を検索したところ、*secundative* 型 (5) だけでなく、*indirective* 型 (6) も観察され<sup>4</sup>、両者のおおよその比率は 55 : 45 であった。

<sup>2</sup> *vaka-* と *vaa-* という 2 つの異形態を持ち、後者は後続する音素が軟口蓋音である場合のみ出現する。本発表では代表形を *VAKA-* とする。

<sup>3</sup> フィジー語で書かれた週刊オンライン記事である *Nai Lalakai* を収集したコーパス今回の調査では 2016 年 7 月 4 日から 2017 年 6 月 26 日までの 1 年分 (全 1526 記事、総語数 864,973 語) を対象とした。

<sup>4</sup> アライメントの交替が確認できた *VAKA* 派生動詞は以下の通り;*vaka-vuli-ca* 「教える」およびその変種、*vaka-ro-ta* 「命じる」、*vaka-tuku-tuku-taka* 「伝える」、*vaka-sala-taka* 「助言する」。

(5) *e dau vaka-taa-vuli-ci ira na gone\_lalai\_R e na wili\_vola\_T (...)* <secundative>  
 3SG HAB CAUS-ARTIFICIAL-learn-TR 3PL ART child with ART reading  
 「彼は読み方を子供たちに教えている」 (aug\_08\_2016\_19\_4)

(6) (...) *vaka-taa-vuli-ca vei keda\_R e dua na lesoni\_T* <indirective>  
 CAUS-ARTIFICIAL-learn-TR+3SG to 1PL.INCL 3SG one ART lesson  
 「我々にある教訓を教えた」 (jul\_04\_2016\_16\_28)

このアライメントの名詞句側の標示は右の表 2 のように示される。∅ は形態的標示を欠いていることを示す。ki と vei の違いは名詞クラスによるものであり、前者は普通名詞と地名に、後者は人名にそれぞれ用いられる。

表 2: VAKA 派生発言動詞のアライメントの標示

	R	P	T
secundative	∅		e
indirective	ki / vei	∅	

発言動詞以外の VAKA 派生動詞では secundative 型 (7)a のみ許容され、indirective 型 (7)b は非文となる。加えて、非派生の発言動詞では indirective 型 (8)a のみ許容され、secundative 型 (8)b は非文となる。

(7) a. *e aa vaka-isulu-taki au\_R e na isulu lokaloka\_T* <secundative>  
 3SG PST CAUS-clothes-TR 1SG with ART clothes purple 「彼は私に紫色の服を着せた」

b. \**e aa vaka-isulu-taka vei au\_R na isulu lokaloka\_T* <indirective>  
 3SG PST CAUS-clothes-TR+3SG to 1SG ART clothes purple

(8) a. *au aa tuku-na vei iratou\_R na ke-mu italanoa\_T* <indirective>  
 1SG PST tell-TR+3SG to 3PA ART PC-2SG story 「私は彼らに君の話をした」

b. \**au aa tuku-ni iratou\_R e na ke-mu italanoa\_T* <secundative>  
 1SG PST tell-TR 3PA with ART PC-2SG story

動詞の形態変化なしにアライメントが交替する点でも発言動詞は特異である。例えば「投げる」を表す動詞でアライメントが交替する際、異なる他動詞派生接尾辞を用いる。(9)a は secundative 型、(9)b は indirective 型の例である。

(9) a. *e viri-ka na gone\_R e na polo\_T* <secundative>  
 3SG throw-TR+3SG ART child with ART ball 「彼は子供にボールを投げる」

b. *e viri-taka na polo\_T ki na gone\_R* <indirective>  
 3SG throw-TR+3SG ART ball to ART child 「彼は子供にボールを投げる」

以上まとめると、VAKA 派生の発言動詞でのみ 2 つのアライメントの交替が観察され、その際動詞の形態変化は伴わないといえる。(5) と (6) に示した VAKA 派生の発言動詞のアライメントの交替による意味的・語用論的相違については本発表で扱いきれないので、稿を改めて論じる。

#### 4. T 項に現れる補文節

補文節を取りうる述語 (CTP, complement-taking predicate, Noonan 2007: 53) にはいくつか意味的な類型が立てられ、発言に関わる述語もそのうちの 1 つである<sup>5</sup>。事実、フィジー語の発言動詞 *vakarota* 「命じる」は secundative 型 (10)a でも indirective 型 (10)b でも、補文節を T 項とすることが多い。

- (10) a. *aa qai vaka-ro-ti ira<sub>R</sub> tale vakarua ko Morgan mera voleni<sub>T</sub>* <secundative>  
 PST then CAUS-order-TR 3PL again twice PRP PN COMP+3PL fall\_in  
 「そしてモーガンは二度整列するよう彼らに命じた」 (FT\_oct\_10\_2016\_23\_13)
- b. *vaka-ro-ta talegaa vei ira<sub>R</sub> na cauravou mera yalomatua<sub>T</sub>* <indirective>  
 CAUS-order-TR+3SG also to 3PL ART young\_man COMP+3PL responsible  
 「若者たちに責任を持つよう命じる」 (nov\_28\_2016\_14\_8)

(10) に示すように、補文節は *me* という形式で標示される。これは起こるべき事態を表す標識である (Dixon 1988: 271)。このことは「命じる」のような CTP が意味的に potential clause を取りやすいという Dixon (2006: 29) の指摘に合致する。

##### 4.1. 補文節と complement strategy

補文節は、ほかの節の項として機能する節として定義される (Dixon 2006: 15, Noonan 2007: 52)。Dixon (2006) は補文節とは別に complement strategy を提案している。complement strategy とは、補文節で表すような 2 つの動詞の連結を、ほかの文法構造を用いて表すことをいう (Dixon 2006: 33)。complement strategy には動詞連続、関係節、名詞化、並置 (apposition)、節連結 (clause linking)、目的連結 (purposive linking) が含まれる (Dixon 2006: 34-40)。ゲマイ語 (アフロアジア語族、チャド語派、西チャド諸語) はこのうち目的連結を complement strategy として用いる (11) (Hellwig 2006)。

- (11) *ni k'wal ndoe hen de hen wul vi*  
 3SG talk CONJ 1SG PURP 1SG arrive SUB 「彼は私に来るように説得した」 (Hellwig 2006: 220)

フィジー語において、(12) の補文節の標示は (13) の副詞節を導く標示と同形である。そのため、*me* 節で導かれる節は補文節ではなく、Dixon (2006) のいう目的連結であるという説明も可能であるように思われる。事実、「命じる」のような動詞で目的連結が認められるという (Dixon 2006: 39)。

- (12) *au vaka-ro-ta vei Jone me lako mai*  
 1SG CAUS-order-TR+3SG to PN COMP.3SG go hither 「私はチョネに來いと命じた」
- (13) *au lako ki Suva meu voli-a na ivola*  
 1SG go to Suva SUB+1SG buy-TR+3SG ART book 「私は本を買うためにスバに行く」

<sup>5</sup> Dixon (2006: 28-30) は SPEAKING、Noonan (2007: 121) は utterance predicate、Schmidtke-Bode (2014: 42) は utterance-P/T とそれぞれ類型を立てている。

Nagaya (2017) はタガログ語のリンカーによって導かれる節が補文節でないことを RRG (Role Reference Grammar) の枠組みを用いて説明している。その根拠として、節の最後に出現すること、焦点となった際リンカーで導かれる節に形態的標示がないこと、疑問詞疑問文で “what” だけでなく “how” も用いられることなどを挙げている。次小節以降はこれを逆手に取り、ヴォイスの操作を被ること、疑問詞 “what” で置き換えられることから、発言動詞の *me* 節は補文節であることを示す。

#### 4.2. ヴォイス操作の適用

発言動詞の *me* で導かれる節は受動態の S 項となりうる。(14) は (12) の受動態である。フィジー語において受動態の主語となりうるのは P 項のみである (Dixon 1988: 222) ので、発言動詞 (indirective 型) の *me* で導かれる節は補文節であるといえる。(14) は (15)a のような受動態と並行的に捉えられる ((15)b は対応する他動詞節)。

(14) *e vaka-ro-ti vei Jone<sub>R</sub> me lako mai<sub>S</sub>*  
 3SG CAUS-order-PASS to PN COMP.3SG go hither 「来いということがチョネに命じられた」

(15) a. *e vaka-vuli-ci vua<sub>R</sub> na vosa vaka-Viti<sub>S</sub>*  
 3SG CAUS-learn-PASS to+3SG ART speech ADJVZ-Fiji 「フィジー語が彼に教えられる」

b. *au vaka-vuli-ca vua<sub>R</sub> na vosa vaka-Viti<sub>T</sub>*  
 1SG CAUS-learn-TR+3SG to+3SG ART speech ADJVZ-Fiji 「私は彼にフィジー語を教える」

#### 4.3. “what” への置換

(12) の補文節を尋ねる疑問文は (16) のように “what” を用いる。一方、(13) の疑問文は (17)a のように *kina* が出現する。*kina* は前置詞句や従属節が前置した際に現れる (Milner 1956: 49, グロスが KINA とする)。*kina* の現れない (17)b は非文であるため、(13) の *me* で導かれる節は項ではないといえる。

(16) *na cava<sub>T</sub> o vaka-ro-ta vei Jone<sub>R</sub> ?*  
 ART what 2SG CAUS-order-TR to PN 「お前は何をチョネに命じたのか」

(17) a. *na cava o lako kina ki Suva?* b. \* *na cava o lako ki Suva?*  
 ART what 2SG go KINA to Suva ART what 2SG go to Suva  
 「何のためにスバに行くのか」

#### 4.4. secundative 型アライメントの補文節

4.2 節と 4.3 節で見た統語テストはすべて indirective 型に現れる *me* 節が補文節であることを示すものである。しかし (10)a のような secundative 型の場合、受動態の S 項なるのは R 項である。加えて、補文節は前置詞句に相当するため、それを尋ねる疑問文は *kina* が出現する。そのため、目的を尋ねるそれと同形になる (18)。このことから、secundative 型の発言動詞の *me* 節は、4.2 節と 4.3 節のテストからは項であるとは結論付けられない。

(18) *na cava o vaka-ro-ti Jone kina?*

ART what 2SG CAUS-order-TR PN KINA

「お前は何をチョネに命じたのか / 何のためにお前はチョネに命じたのか」

## 5. おわりに

本発表で主張したことは (19) の通り;

- (19) a. *VAKA-* による派生動詞のうち「教える」、「命じる」といった発言動詞は、アライメントの交替が観察される。他動詞接尾辞の変更なしでアライメントが交替するという点で、発言動詞は特異である。
- b. 発言動詞に現れる補文節は (少なくとも *indirective* 型については) 上位節の項として機能しているといえる。その根拠として、受動態の操作を被ること、疑問文で “what” を用い *kina* が出現しないことの2点が挙げられる。

今後の課題は (20) の通り;

- (20) a. なぜ発言動詞にのみアライメントの揺れが観察されるのか、ほかの言語でも似た現象があるか。
- b. 補文節内の制限 (Dixon 2006: 21-22) や脱範疇化 (*deategorization*, Malchukov 2006) の程度はどのようにになっているか。
- c. 前置詞句と副詞節は二分できるか、できるとしたらどのように確認できるか。

<グロス略号一覧> 1, 2, 3: 1st, 2nd, 3rd person / ADJVZ: adjectivizer / ADVLZ: adverbializer / ART: article / ARTIFICIAL: artificial / ASP: aspect / CAUS: causative / CNT: continuous / COMP: complementizer / CONJ: conjunction / HAB: habitual / INCL: inclusive / KINA: *kina* / PA: paucal / PASS: passive / PC: possessive classifier / PL: plural / PN: personal name / PRP: proper article / PURP: purposive / SG: singular / SUB: subordinator / TR: transitivizer

<参考文献> Dixon, R. M. W. (1988) *A Grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: The University of Chicago Press. / Dixon, R. M. W. (2006) Complement Clauses and Complementation Strategies in Typological Perspective. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Complementation: A Cross-Linguistic Typology*, 1-48. Oxford: Oxford University Press. / Hellwig, Birgit (2006) Complement Clause Type and Complement Strategies in Goemai. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Complementation: A Cross-Linguistic Typology*, 204-223. Oxford: Oxford University Press. / Malchukov, Andrej (2006) Constraining Nominalization: Function/form Competition. *Linguistics* 44 (5), 973-1009. / Malchukov, Andrej and Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) Ditransitive Constructions: A Typological Overview. In: Andrej Malchukov and Martin Haspelmath and Bernard Comrie (eds.) *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*, 1- 64. Berlin: De Gruyter. / Milner, George B. (1956) *Fijian Grammar*. Suva: Government Press. / Nagaya, Naonori (2017) On the Nature of Complementation in Tagalog. *handout at the International Conference on Role Reference Grammar 2017*. / Noonan, Michael (2007) Complementation. In: Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description Vol 2*, 52-150. Cambridge: Cambridge University Press. / Schütz, Albert J. (2014) *Fijian Reference Grammar*. Honolulu: Pacific Voices Press. / Schmidtke-Bode, Karsten (2014) *Complement Clauses and Complementation Systems: A Cross-Linguistic Study of Grammatical Organization*. PhD dissertation, University of Jena.

<調査資料> The Fiji Times Online | Nai Lalakai Online: <http://nailalakai.fjitime.com/> (最終閲覧日 2017/9/30)